

スポーツ選手の成績下降によるメディア報道の変化について

—新聞報道とイチローの言動に着目して—

深海菜実子

キーワード：イチロー，新聞報道，移籍・引退，通算記録の達成

1. 研究の動機

イチローは日本で数々のタイトルを獲得して日本人野手として初めてメジャーリーグに挑戦した。当時、日本人野手の期待値は低く、「君はメジャーリーグの投手を打てるのか」と屈辱的な質問を受けるなど、批判的な報道が多く見られた。しかし、イチローはメジャーリーグでも1年目から輝かしい成績を残すなど、日米両球界でトップに君臨し、国内外に多くあった批判の声を覆した。

メジャーリーグ挑戦後、イチローの実力がメディアに認められるようになった過程を、木原が『「イチロー観」の変遷に関する研究』(2011)で明らかにしたが、全盛期を終え、成績が下降していくと考えられる引退までの時期であっても、イチローとメディアの関係は維持されるのか、または変化していくのかという点が課題として残された。

そこで、成績が下降するにあたって、メディアがイチローをどのように報道したのかに興味を持ったことが本研究の動機である。

2. 研究の目的と意義

本研究の目的は、全盛期を終えた選手に対して報道がどう変化したのか、あるいは変化しなかったかを明らかにすること、さらに日本とアメリカにおける報道の違いを明らかにすることである。

また、メディアによる報道がスポーツ選手と世間に与える影響の大きさを追求し、今後メディアとスポーツ選手がより良い関係性を築いていくための一助となることを本研究の意義とする。

3. 先行研究の検討

イチローとメディアに関する先行研究には、川島(2002)、木原(2011)の2つが挙げられる。これらの先行研究では、否定的であったメディアの評価を全盛期のイチローが数々の実績によって覆したことを証明している。

しかし、成績が下降してからのイチローとメディアに着目した研究は見られなかった。

4. 研究の方法

イチローが10年以上在籍したマリナーズを離れた2012年から引退を決意した2019年までを対象期間とした。この期間を移籍ごとに以下の時期区分に分け、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の3紙を対象に資料を収集し、研究を行った。

- 1) ヤンキース時代(2012～2014)
- 2) マーリンズ時代(2015～2017)
- 3) 二度目のマリナーズ時代(2018～2019)

史料の対象を新聞記事に絞った理由は、成績下降を追うにあたって報道の細やかな変動を見るには、毎日必ず情報を発信しており、正確に史料を収集できることが必要であると考えたからである。

時代ごとにどのような報道の特徴があるのか、さらに成績が下降するなかで達成された大記録に当たって通常の報道と違いは見られるのかに焦点を当てて研究を進めた。

5. 本論

5.1. 時代ごとの報道の特徴

ヤンキース時代には打撃、打順、起用法についての記事が多く見られた。不動の一番打者として10年連続年間200安打を放っていた全盛

期と同じレベルの活躍が期待されていたために、試合に先発出場して、打撃で好成績を残すことが評価されていた。

マーリンズ時代では現役最年長野手になっても衰えない走塁や守備が注目され、妥協せずに努力を続ける姿勢が多く報じられるようになった。全盛期のような活躍ではなく現役最年長野手としての活躍に期待が変化したために、プロ意識や技術の高さで年齢を重ねてもパフォーマンスの質を維持していることが評価されるようになったと考えられる。

マリナーズでは試合に出ないものと一緒に練習して選手をサポートし、選手復帰も可能という異例の契約が結ばれた。選手時代と変わらない野球に対する姿勢が評価され、チームへの貢献度やチームからの絶大な信頼に関する報道が目立つようになった。イチローの価値がプレーに止まらなくなったために、偉大な記録を残したレジェンドとしてではなく、一人の人間として報道されるようになった。

5.2.大記録の達成に関する報道

日米通算 4000 安打、日米通算 4257 安打、米通算 3000 安打という 3 つの記録を順に達成していく中で、日米両メディアの記録に対する態度が変化した。日本はどの記録にも好意的な態度を示したが、米国は記録によって態度が変化した。

日米通算 4000 安打では、レベルの違うメジャーリーグと日本のプロ野球の安打を合算する日米通算という記録への不満と、イチロー自身の節目への称賛の両方があったために、批判的な態度と好意的な態度が共存していた。

メジャーリーグの通算安打記録を抜いた日米通算 4257 安打では、母国の偉大なメジャーリーガーが外国人選手に抜かれることに強い抵抗感があったために、大半が批判的な報道となった。

米通算 3000 安打では、長い歴史を誇るメジャーリーグでも史上 30 人目となる快挙であったため、称賛されるべき功績として好意的な態

度へと変化した。

またイチローの技術や強さに関する報道が、抽象的だった日米通算 4000 安打から日米通算 4257 安打では具体的へと変化し、米通算 3000 安打では減少した。

日米通算 4257 安打では通算記録に対して米国で批判的な報道が高まったことから、イチローの実力の高さを証明するために、日本のメディアが具体的にイチローの技術や思考を報じた。しかし、米通算 3000 安打は、米国でも異論なしの大記録であるからこそ、イチローの技術や思考を詳細に説明して実力を認めさせる必要がなくなったために、報道が減少したと考えられる。

6.結論

本研究から、時間の経過とともに時代の特色やニーズが変わり、それに伴って報道も変化すること、また事実の核となる要素の違いによって、日米のメディアで報道の量や内容、注目度が大きく変わり、ひとつの変遷が生まれることがわかった。

全盛期にはプレーの際立った部分にメディアの注目が偏る可能性があるが、成績が下降することでそれまで取り上げられていなかった選手のあらゆる側面に焦点が当てられ、報道の質が変化することが本研究の目的に対する結果として明らかになった。

7.今後の課題

本研究ではメディアがイチローの成績下降をどのように報道したのかを明らかにしたが、イチローがメディアに対して何を考え、どう関わっていたのかについても検討することで、メディアとスポーツ選手の関係性をより詳細にかつ多角的に明らかにすることができると考えられる。そのため、イチローの現役時代の発言や引退後に出版された著作物などからイチローの考えを読み解くことが必要であると考え、今後の課題としたい。